

書評

太田紘史編著

『モラル・サイコロジー—心と行動から探る倫理学』

(春秋社、2016年)

鈴木 貴之

人間の心に関する科学的探究の進展はめざましい。心理学や認知科学に加えて、近年では、神経科学、進化生物学、行動経済学など、さまざまなアプローチによって、心のメカニズムの解明が進んでいる。道徳に関する心の働きも例外ではない。道徳的な問題について考えるときの脳の働き、道徳に関する文化差、道徳の進化などについて、過去数十年のあいだに、急速に研究が進んでいる。

では、これらのいわゆるモラル・サイコロジー研究によって、古来哲学者が取り組んできた倫理学の諸問題に解決がもたらされることはあるだろうか。一つの典型的な回答は、これらは事実に関する研究であるのに対して、倫理学の問題は価値や規範に関する問題であるため、前者によって後者を解決することはできない、というものである。しかし、モラル・サイコロジー研究のめざましい進展を目の当たりにすれば、そこに倫理学の諸問題を解決するための何らかの手がかりを期待することは自然だろう。

本書の目的は、このような状況をふまえ、近年のモラル・サイコロジー研究の成果を概観し、その倫理学的な意義について検討を行うことである。ところが、興味深いことに、その結論は多くの場合否定的なものである。たとえば第4章では、道徳的判断においては感情が重要な役割を果たすと考える感情主義のバリエーションを整理したうえで、感情主義と対置される理性主義がモラル・サイコロジー研究によってただちに退けられることはないと論じられる。また第5章では、道徳的問題に関する直観的判断は信頼できないという主張が批判的に検討され、その根拠とされる一連の経験的研究からは、そのような結論を導き出すことはできないと論じられる。

経験的なモラル・サイコロジー研究に大きな期待を寄せる者にとっては、本書のこのような慎重な姿勢は物足りないものに感じられるかもしれな

い。しかし、哲学的に見れば、このような姿勢はきわめて健全なものである。事実的な問題と価値的な問題のあいだに何らかのギャップがあるのは否定しがたいことであり、このギャップを埋めようとする試みの妥当性を冷静に評価することこそ、モラル・サイコロジー研究において哲学者に求められる役割だからである。

とはいえ、本書のこのような慎重な姿勢は、事実に関する知見から価値に関する問題に何らかの教訓を引き出すことは本当に可能なのだろうか、という疑念を再燃させる。多くの章で論じられているように、そのような試みの多くが現状では失敗に終わっているのは、経験的なデータが不十分だからなのだろうか、概念的な整理が不十分だからなのだろうか、あるいは、このような試みはやはり根本的に誤っているのだろうか。(このような疑問が生じる場面を一つだけ具体的に挙げよう。第6章の結びで、信原は、内在主義と外在主義および構成的内在主義と非構成的内在主義の対立に経験的探究によって決着をつける可能性を示唆している。しかし、どの脳活動が道徳判断や動機を担うのかは、この論争と中立的に特定できるものではないかもしれない。)

この疑念は、モラル・サイコロジー研究と規範倫理学の関係においてとくに深刻なものとなる。メタ倫理学の問題の多くは本質的に事実的な問題であり、モラル・サイコロジーに関する経験的な知見との結びつきを比較的想定しやすい。これに対して、たとえば功利主義と義務論の対立に、経験的知見によってどのようにして解決がもたらされうるのかは明らかではない。

もっとも、われわれはここで事実と価値は別物だという立場に安易に立ち返るべきではないだろう。ここでわれわれに求められているのは、さらなる経験的知見の蓄積とさらなる哲学的分析によって、価値や規範に関して何が言えるのかを、粘り強く、具体的に明らかにしていくことである。本書は、その重要な第一歩だと言えるだろう。

白井千晶編著

『産み育てと助産の歴史—近代化の200年をふり返る』

(医学書院、2016年)

梅澤 彩

本書は、歴史学・社会学・助産学等を専門とする研究者およびジャーナリストら計14名により執筆された論文集である。「出産の歴史社会学、出産の社会史という観点からみると、江戸中期に近代の萌芽があるとするのが定説」(p. 2) という前提に基づき、「第1部 江戸末期のお産事情」、「第2部 明治から大正、昭和初期にかけて変わる産婆の状況」、「第3部 戦後の産み育ての変遷」、「第4部 現代のお産と助産師教育の課題」の4部で構成されている。

第1部および第2部は、江戸末期の産科書や教科書に登場する素人の出産介添え者「取り上げ婆」(p. 7) から「近代医学、衛生学、助産学の教育を受け、国家資格をもつ医療専門家として」の産婆(p. 10) への転換、明治期以降の産婆の制度化を中心に、出産と助産の歴史を整理したものである。とりわけ、第2部は「産婆の教育と養成、墮胎、医師との関係、流死産と水子供養、養子縁組、戦期の役割」(p. 25) といった観点から、出産と助産の変遷を検討するものであるが、ここでは、政府の人口政策に取り込まれる産婆の姿、近代家族の誕生・急速な産業化と都市の貧困問題を背景とした社会事業としての産院の誕生、出産の医療化とその影響を受ける産婆の姿を通して、「出産そのものが個人的営みであると同時に、国家の子どもを生み出す公的な事象であること」(p. 104) を明らかにしている。

第3部は、第二次世界大戦後の制度改革—医療法・医師法・保健婦助産婦看護婦法・優生保護法(母体保護法)の公布・施行等—を契機として、受胎調節と家族計画、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、出産科学技術の進展(超音波診断の導入と普及)、「自然出産運動」(p. 218)の普及といった観点から、助産婦の果たしてきた役割、戦後の女性の産み育てに生じた変化を分析する。ここでは、受胎調節の場における「国の人口政策から女性た

ち個人の人権保障」(p. 132)への転換、出産の場における「産まされるお産から産むお産」への転換を通じた女性の「当事者性の確立」(p. 214)が、国内外の動向と対照して詳述されており、フェミニズム、ジェンダーの視点からも興味深い章立てとなっている。

第4部は、出産医療に主体的に関わる立場を獲得した女性が、医療の場における消費者と化し、自由な市場における出産を選択するようになった一方で、産科の訴訟リスクの増大、お産のサービス化・お産における格差—出産施設のブランド化・出産環境の地域間格差—、看護系大学の拡大に伴う助産師教育の変容—少子高齢社会において高齢者を看護する職員の養成が急務とされ、助産師養成は隙間産業的に行われてきた(p. 279)—、混合病棟といった問題の現状と課題が指摘されている。

上述のように、本書は、産婆・助産婦・助産師の存在を軸として、「産み育て」と「助産」の歴史を回顧するだけでなく、「助産をめぐるポリテクスとダイナミクス」を描く(同書「はじめに」)という編著者の企図を十分に達成している。

本書を紐解くにあたり、同書のタイトルから連想されるキーワード—「子を産む・産まない・産めない」(望まない妊娠・出産回避を含む)、「子をもつ・もたない・もてない」(「子を産む」という場合は、一般に自然生殖が想定される)、「子を育てる・育てない・育てられない」、「性的自己決定」、「生殖補助医療」、「家族形成と公序」(婚内子・婚外子、同性カップルの家族形成等)—を考えてみた。これらのうち、墮胎、捨て子、養子縁組、女性の性的自己決定に基づく避妊については、本文またはコラム等において言及されていたが、ロングフル・バースの問題や生殖補助医療に関する問題、家族形成と公序に関する問題について殆ど言及されていなかった点は残念である。しかし、本書に掲載されている論考や資料の充実度からみると、紙幅の都合上、やむを得なかったものと思われる。また、上記キーワードのいくつかは、「産み育てと助産」というテーマを設定した段階で対象から外されたようである。これらの問題については、次の著作に期待したい。

川島大輔、近藤恵編著

『はじめての死生心理学—現代社会において、死とともに生きる』

(新曜社、2016年)

糸 和彦

本書のタイトル「はじめての死生心理学」は二つの意味をあらわす。まず、日本で初めて「死生心理学」という言葉を題名に入れた本であること。次に、この分野を初学者でも学べるように、基礎的事項の解説から始めていることである。また、心理学といっても、死にゆく人の心理のみを狭く取り上げた本ではない。ここでの心理学は、心身二元論でいうところの、体ではないもの全てを心と考え、死に関する身体的問題以外の全てを扱うもので、広範な事項を取り上げて網羅的である。また、本書は二つの意味で実践的である。まず、編者・著者の多くが、実際に死に瀕する方と日常的に接していることから、介入者の視点で書かれた部分が多く、理論より実践・経験に基づく記載になっており、実臨床現場で役立つという内容面の実践性である。次に、全ての章に「ワーク」が設けられ、書き込みする行為により、読者自身も実践を迫られる点である。そのため、本書は、マーカーや付箋ではなく、ペンを持って読む必要がある。そこで、この本は、読者自身にも、死という重大な課題に対して深刻な変化をもたらす可能性があり、序章のワークには「心の準備体操」という読者自身の安全を期するためのワークがあることが印象的である。これは編著者の川島が執筆した、自死で心理的なダメージを受けた人に対するワークブックにもあるもので、生命や生きる意味について軽々しく語るべきではないという配慮に基づくと思われる。

内容は、3部に分かれ、第1部「死を見つめる」は、総論的に死生に関するこれまでの研究が4つの項目にまとめて紹介されている。まず、死を社会一般、当事者、周囲の者などの異なる視点から見た時の、死に対する態度・死に至る過程・死による悲嘆と回復についての研究が概観されている。この分野の本としては最初に一般社会にも広まったキューブラー・ロスの「死の瞬間」の頃の歴

史から始めて、予期悲嘆、レジリエンス、外傷後成長などの新しい概念まで、広い範囲の研究が概観されている。さらに「自殺」が独立した項目として取り上げられていて、4章のワーク「自殺予防クイズ」は知識の確認になる。

第2部「死と向き合う」は、各論的に年代ごとに分かれた6章からなり、周産期から乳児期、幼児期から児童期、青年期、成人期、中年期、老年期という、人生の6個の時期の死生の特徴について詳述する。例えば、子どもであれば、子ども自身が死に瀕する場合の子ども自身とその家族という状況、逆に、子どもが家族などの死に瀕する状況もあり、子どもという特徴に応じて対応すべき状況だけでもいろいろある。そして、大人の死に対する反応はある程度予想できるが、子どもの反応は知識がなければ予想できないものもある。このような多様な状況を取り上げた第2部は、本書の特徴であり主幹をなし、各項目とも読み応えがある。周産期から幼児期の死は、家族とそれを支える周囲の視点から語られるが、出生前診断など生死の概念を揺るがす倫理的課題も多い。児童期から思春期にかけての項では、死の体験が死の概念の発達に大きな影響を与えることが興味深い。若年者では自死が主要な死因になるが、生死の観念の発達にも学ぶべき点が多い。老年期や終末期の死は、従来から多くの研究があるが、青年～成人～中年を3項目に分けるのは目新しい。読み進めると、死のインパクトは年代の微妙な差により大きく異なり、一般に若年者の方が死の不安が強いことや、評者のように50歳を超えて人生の後半に入った後の死のとらえ方が変化することなど、なるほどと納得させられた。

第3部「死を探求する」は、研究方法について研究倫理から始めて、量的研究・質的研究に分けて方法論を取り上げている。死生学に限らない一般論もあり、一般の読者には不要な内容も多いが、この章があるため研究者のための教科書としても使用できるものとなっている。評者はこの分野の専門ではないが、わかりやすく、実践的で役に立つ優れた教科書と思う。

バリー・ブザン著 (大中真・佐藤誠ほか訳)
『英国学入門—国際社会論へのアプローチ』
(日本経済評論社、2017年)

大庭 弘継

評者の専門は、人道危機への対処である。だが、日本のような国家が主語では、たとえば南スーダンの人道危機や西アフリカのエボラ熱の流行など自国に関係しない問題に対し「どうすべきか」を語ることは難しい。かといって、人類や世界といった主語では漠然としすぎる。

その漠然とした主語を、学術的に語りうるものとして精緻化したのが英国学派である。英国学派は、世界の問題を語る主語として「国際社会」を提示し、議論の軸足とした。そう、「英国学派とは、国際社会の理論である」(x iii)。本書は、その英国学派的国際関係論の全体像を描き出した著作である。

この国際社会を、英国学派は「アナーキカル・ソサエティ(無政府社会)」として提示する。注意すべきは、アナーキーだがカオスではないことだ。その証拠に、国際社会にはルールがあり制裁もある。この無政府社会では、世界の混乱を防ぐための仕組み(秩序)と環境問題や人権問題の解決などの目的(正義)が共有されている。

この国際社会概念を軸に、英国学派は3つの世界観を共存させる。世界とは、「諸国家がアナーキー下で闘争を繰り返す国際システムだ」とする立場(現実主義、ホブズ主義)、「個人や非国家主体がコスモポリタニズム的な世界社会を作り上げるのだ」とする立場(革命主義、カント主義)、「諸国家は協調しながら国際社会を作っているのだ」とする立場(合理主義、グロティウス主義)である。英国学派的論者の多くは、世界観の違いを受け入れたうえで議論を行い、さらに「3つの伝統の中で立場を二分する境界に、跨って立っている」(19頁)という柔軟性もある。

こういった柔軟性は、歴史研究の重視に由来する。それも、「近代以前の事例に主に注目し、文明のあけぼのにまで遡る」(58頁)。かつて存在した、古代ギリシャや中国の朝貢システムなどの「国際社会」も分析することで、現状を相対化す

るとともに、今後の方向性も探究する。たしかに英国学派は、ヨーロッパ国際社会がグローバルな規模にまで拡大する物語、と一応は描き出している。だが、この物語は議論のたたき台の位置づけで、たとえば国際社会の成立は「ヨーロッパの出来事だったのか、それともよりグローバルなものとして非ヨーロッパ社会との相互作用の中でともに展開していったのか」(101-2頁)とさらなる議論を展開する。

また英国学派は、多くの国際関係論で忌避されがちで、規範的な議論も行う。たとえば、ジェノサイドに対する軍事介入、いわゆる人道的介入の論争にも取り組む。こういった論争をめぐる立場として、「人類諸共同体の倫理的多様性」(119頁)を受け入れ国家主権を重視する多元主義(puluralism)と、「コスモポリタニズムの価値」(152頁)を受け入れ国際介入を支持する連帯主義(solidalism)とがあり、その論争を英国学派は内包している。

前提となる方法論だが、規範的研究手法(進歩的な価値の追求)と構造的な研究手法(客観的、実証的)の2つを英国学派は組み合わせている(31頁)。しかし、アメリカ的な「検証可能な因果論的仮説」(32頁)を含まないこともあり、批判も多い。その一方で、「直ちには解けないような倫理をめぐる論争についても取り扱うことができ」(46頁)、「歴史的に存在した、および現存するさまざまな国際社会の制度的枠組みを究明する」(47頁)点に大きな強みを持つ、とする。

以上のような特徴を持つ英国学派を紹介した本書は、11名の訳者による力作である。そもそも訳者たちの専門は、バルト諸国、南アフリカ、難民、人道的介入、核兵器、国際政治経済、といったように多種多様である。この訳者の構成そのものが、英国学派が提供する視座の有益性を傍証している。従来の国際関係論で取り扱い困難だった問題、すなわち国家だけでは語りえない問題、現在だけでは収まらない問題、倫理や規範をめぐる問題に対し、英国学派は魅力的な視座を提供しているのである。

土井健司編著

『自死と遺族とキリスト教—「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』

(新教出版社、2015年)

マイケル・シーゲル

編者後書きによると、本書は、1998年から日本の自殺者数が年間3万人を超えていた状況を受けて、2010年～12年度に行われた「霊的支援者プログラム」の開発を目指す自殺を巡る共同研究に基づいており、掲載されている各論文はその研究プロジェクトから選ばれたものである。編者の説明の通り、自殺念慮者や遺族への関わりや自殺予防等への取り組みに向けて、特にプロテスタント牧師や信徒等の育成を目的にしたものである。『「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』というサブタイトルからは、自殺に関するキリスト教の思考の変動に関する少し神学的な話を予想したが、そのような内容は最後の論文にしか出ず、むしろ、多くの執筆者は様々な形の自殺問題に関わってきた経験について述べている。父親の自殺から最終的に牧師になり、自殺の予防に携わるようになった人、いのちの電話に関わってきた人など、自死予防に取り組んできた人、自死者の葬儀に携わってきた牧師や葬儀屋など、様々な立場で自死・自殺の課題に接してきた人たちの経験が語られていて、その経験に基づいた思索も展開されている。深く携わってきた人たちによる感想であるだけに、自死・自殺の問題に関わろうとする多くの人の参考になると思われる。

一方で本書の編集に当たっては、研究に携わった人たちやその研究が目指していた霊的支援者プログラムに関わる人たちやそれに参加する人たちが焦点になっている印象が強く、まったくの部外者にわかりやすくなるための工夫が欠けているように思う。タイトルから期待するような内容は最後の論文にならないと出ず、最初から、様々な現場からの語りになっている。後書きに書いてある説明がむしろ前書きに書かれていれば、読者は何を期待すればいいか分かり、もっと違和感なく読めるだろう。

最後の論文「自死の何が罪とされてきたのか」

は編者によるものである。自殺に関して歴史を通じてキリスト教が取ってきた姿勢を分かりやすく手短かにまとめているものであり、アウグスティヌスやアキナスの思想をかなり中心に据え、カトリックもプロテスタントも違和感なく参照できるものである。

この論文は、自殺は罪であるかどうかという問いかけに関して、自殺に関する理解の変動に焦点を当てているが、「罪」とは何かという理解の変動も重要であるように思う。現代の理解はただ単に罪を「神の掟を破る罰されるべき行為」としてではなく、むしろ掟も罪も本書が重視している関係性に関連付けて理解されるようになってきているので、その変動も自殺に対するキリスト教の姿勢に大きく影響しているように思う。

それに、カトリックの人たちが違和感を持つところが少しだけあるように思う。本著では、カトリックもプロテスタントも自殺を罪とするが、「それが赦されるかどうか」に関して別れると述べている。確かに、カトリック教会は死ぬ瞬間のことを重視し、罪の赦しは死ぬ瞬間までととらえてきた。自殺という罪の行為は即座に死をもたらしものであるとすれば、赦されないとも考えられる。しかし、自殺の場合は、死に至らしめる行為と実際の死の間に意識のある間が少しでもあれば、その間に悔い改めることもあり得るので、その場合には赦しは可能である。それに、カトリックの思想で罪とはどのような条件で成立するかを考慮する必要がある。カトリックでは、罪とは、悪だと承知している行為を自分の自由な選択で意図的に行うことである。行為自体が悪であること、その行為を果たす人が行為自体が悪であることを承知していること、意図しているのはその行為自体であること、それを自由に意図することができるだけの自由な意志があることはいずれかが欠けていれば、罪は成立せず、赦しがあるかどうかは問題にならない。殺害（自らを殺害することを含む）は悪であると考えられている。しかし、たとえば人の命を助けるために自分の命を犠牲にする人が意図しているのは自分の死ではなく、もう一人を助けることである。これは罪の「つ」の字までもないことである。また、自由な意思を妨げる精神病や精神的な

悩みによって自由意志が妨げられているならば、それは罪にはならず、赦しがあるかどうかは問題にならない。

したがって、自死する人は必ずしも自殺という罪を犯しているとは限らない。史上自殺したすべての中で実際にその罪を犯した人が一人もいないことさえあり得る。カトリックでは、原則としては自殺者の葬儀をしないという慣習は確かに存在した。私はカトリックの神父であるが、1960年代に養成を受けていた期間において、自殺者の葬儀をすべきかどうかということが話題になった時、自殺した人が自由な意思が妨げられるほど追いつめられていたと考える理由があれば、葬儀を挙げるべきだと神学校で言われたことがある。私は挙手して尋ねた。「自殺したこと自体はそう考える理由になりませんか」と。その時、「そういう考え方もいい」という返事を頂いた。本書の後書きには、「私は自殺者の葬儀はしません」と発言した神父の例が挙げられているが、それはまれな態度ではないだろうか。自殺者の葬儀がカトリック教会で断られた例を少なくとも私は知らない。過去において、そういうことは確かにあった。しかし、自殺に対する理解が変わっただけでなく、罪も救いも関係性に関連付けられて理解されるようになったこともあり、教会の自己意識は上から管理する権威から支え合う共同体へと変動したということもあって、葬儀自体は遺族のためのものだという認識も強まってきたことで、現在では対応が大いに変わっているのである。

橘宗吾著

『学術書の編集者』

(慶應義塾大学出版会、2016年)

大隅 直人

寺山修司の『幸福論』の冒頭の章「マッチ箱の中のロビンソン・クルーソー」は、すぐれた読書論である。寺山は、幸福というものについて書物の中で論じることの限界から話をはじめている。そこで繰り出される、この詩人らしい問いかけのひとつとして、たたみ一畳位の大きさで、厚い鉄の表紙のついた「偉大な書物」についての夢想在

登場する。寺山は、こう書く。「要は、その書物をめくるに要する体力の問題にかかわっている。その鉄のページを、全力でひらいて「意味の世界」と対決するときの疲れ方——労働にも似たころよさのようなものが、なぜか欲しくなってくるのである」(寺山修司『幸福論』角川文庫、1973年、13-14頁)。

本書の著者も、序章「学術書とは何か」において、たとえば電子ジャーナルの普及にともなって、学術成果を「情報」として捉える態度が浸透している昨今の状況について、「ひとことで言えば、そこに欠けているのは、「作品」性であり、人間の知と身体を賭した信頼性の提供です」と言い切る(20-21頁)。第1章「編集とは何か」では、インターネットにおける検索機能の突出にたいして、「読むことが、特に体系性や世界性を読むことが、衰弱しつつあるように見えます」と指摘し、検索の便利さは否定しようもないが、「しかしそれは、読むことに取って代わることはできない」とし、「むしろ、不完全な情報の中で生きるしかない人間が、創造的に生きようとするれば、こうした、読むことによる自己変容・自己変革は最も重要なものの一つです。そしてこの自己変革こそ、イノベーションといわれるものの根本ではないかと思えます」と述べている(30頁)。第2章「企画とは何か」においては、ケーススタディとして取り上げられている『漢文脈の近代』の執筆者である齋藤希史氏が第一草稿は必ず手書きで書くというエピソードを紹介し、そのことについて「これはコンピューターが苦手ということではまったくなく、いわば滑った文章、饒舌なだけの文章にならないようにするためだということでした。これにはとても感じるどころがありまして、言いたいこともあります。これ以上はやめておきます」と記している(81頁)。ちなみに、この第2章には、重要な用件を執筆者がメールで伝えてきたことについて、「そんな大事なことをメールで言うとは！と、だいお腹を立てた」と書いているくだりもある(79頁)。

以上、序章から第2章にかけて、はなはだ偏った抜き書きで恐縮だが、およそ学術書にかかわる人間であれば、誰もがきちんと考えたい、考えね

ばと思うような事柄が、ひとつひとつわかりやすく論じられており、著者の言う「人間の「文」の道」(52頁)というものをめぐる、一貫した、まっすぐな態度に、畏敬の念を覚えざるを得ない。電子化全般やインターネット、(本書では触れられていないが)AIやVRといった事柄と、人間とのかかわりについても、さまざまな予想や考え方があると思うが、まずはこのようにはっきりした態度を決めることが、創造的で生産的であると私も思う。本書を読んで、そのことについて、つよく再認識させられた。

第3章「審査とは何か」と第4章「助成とは何か」も、学術書が成立するために必要な条件について、論点をていねいに整理するのみならず、そこには、きわめて現実的な提言が含まれており、とてもためになった。

第5章「地方とは何か」は、「知の普遍性」というものについての、非常にすぐれた考察となっており、「いずれにしましても、「めんどくさい」道を通してしか——そうした道を含むものとしてしか——表現されない知やスタイルがあることを認識すべきなのです」という締めくくりの言葉も、ストンと腑に落ちて、胸がすく思いがした(150頁)。

付録のインタビュー「学問のおもしろさを読者へ」は、対話によって引き出されるなにかが、本体の不足を楽しく補ってくれていて、さらには本全体を振り返るのにおおいに役立った。

著者のような、ほんとうにすぐれた編集者が、ここまで自分の経験や知識や思想を公にしてくれたということは、ありがたく、とても貴重なことだと思う。

著者は、自らについて「話すのが苦手な著者に会うのが怖い編集者」などと書いている(53頁)。けれども、饒舌というのとはまったく異なるが、著者のつよい思いのようなものは、本書の端々、行間から、溢れこぼれているように、私には感じられた。

その上で、人が生きて行くために、自分の人生を生きるために、それぞれに育てて行かねばならない「志」のようなものについて考えることは、あくまでも読者自身に委ねる。そういった厳しさ

においても、あくまでも一貫したものを感じた。そのことにも、共感せざるを得ない。

ひとつ補足するならば、『京都大学文学部の百年』という冊子に、著者が寄稿した文章が収録されている。タイトルは「書けなかった卒論——「考える輩」を尊ぶ」というもので、インターネット上でPDFが公開されているので、読むことができる。このエッセイを読むと、著者のナイーブなところ、志のありかのようなものを、感じるができる。本書の帯には、「読むこと そして挑発=媒介」という言葉が印刷されているが、この「挑発」の中心にあるなにかについて、さらにあれこれと想像できるのではないかと思う。本書に興味を持たれた方には、あわせて読まれることをおすすめしたい。